



## 山のない民

ラトヴィア・リーガ市在住

黒澤 歩



民謡をモチーフとした彫刻が点在する「民謡の山」(シグルダのダイナ公園)

### ラトヴィア人の「山」

見渡す限りの平原にあるラトヴィアに、日本人が想像するような山はない。国土の最高地点は312mで、それはテレビ塔よりも低い。人は無いものに惹かれるためか、「山」という単語はラトヴィアの地名や苗字によく使われている。

ラトヴィア人にとって、山というものは単なる地理的な概念にとどまらない。何かしら特別な催しを、「山」に結びつける節がある。はるか昔に開催された写真家の集いは場所のみならず集いそのものを「写真の山」と名付けられたし、民謡をモチーフに作られた彫刻の公園は「民謡の山」と呼ばれた。そして、2008年夏には「歌の山」ができる予定だ。それは、5年に一度の大合唱祭のことである。

数年前から着々と準備されてきた「歌の山」は、7月5日の大パレードで目に見える形となり、12日の夜更けに精神的な山となる。今回からインターネット上で、「歌の山」を築くレポートを各パーツごとに練習しておくこともできる。(参照：<http://www.kori.lv/index/songs.php>、合唱祭そのものの情報は<http://www.dziesmusvetki2008.lv/>)

### 歌わなければ帰れない

合唱祭では民謡だけでなく歌謡曲や現代曲、ときには外国の曲も

歌われる。特にソ連からの独立運動の精神的な支柱となった1980年代のポップスは、特別の感慨が込めて歌われる。そして、ラトヴィア人には「歌わなければ合唱祭が終わらない、家に帰れない」歌が少なくとも三曲はある。まず、「我が祖国に (Manai dzimtenei)」は、ソ連時代も終わりに作られた曲である。

我らがダウガワ河が教えてくれた話さ—運命が流るごとく、歌が自分の祭りを祝って若者たちを目覚めさせた。そして若者が運命に立ち向かいながら歌った歌は、何百年も色あせない。血の雨がまだ降って、背の高い松の木をへし折るけれど、歌の嵐を巻き起こして立ち向かおう。光の城の山でいつまでも歌おう。かすかな声をはるか大地にそよぐ。歌が自分の祭りを祝って若者たちを目覚めさせた。そして永久に流れるダウガワ河の岸边で若者が歌った歌は、永遠のごとく色あせない。折れた松は我らの心に伸び、新たな足取りで新たな朝を呼ぶ。永遠に歌いながら歩もう。光の城の山でいつまでも歓喜しよう！

この歌の最後の歌詞を引き継ぐかのように、次に歌われるのが荘

厳なアカペラ曲「光の城 (Gaismas pils)」だ。国がまだ存在しなかった19世紀末に書かれたこの歌は、存在を維持するため肩肘を張ってきた民族を証明するようだ。

神の大地クルゼメよ、自由の民を守る者よ、年老いた神々はいずこに消えたのか／自由の民の息子たちは古い時代の光の城で揺れている、もみの木の森の真ん中に明るくそびえる光の城／父なる大地の谷に血が流れる日が昇った。民族は支配され、英雄たちは殺された／みるみる溺れ消え去った光の山にそびえる城。そこに眠るは我らが神々、民族の精神の財宝なり／古い檜の木々が最後の一輪を咲かす。聖なる言葉を隠すは心底の傷／それがわかれば城は立ち上る。民族の栄誉をはるか響かせ、きらめいて／我らが息子たちは忘れ去られた聖なる言葉を知った。求めると立ち上る光、光の城は蘇った。

この歌が響くころ、ラトヴィア人は大きな山をそれぞれの心に見出し出している。そして、国歌に相当する叙情的な民謡「風よ、吹け」が沸き起こると、祭典の締めくくりとなる。さて、今年、どんな山がそびえることか。